

茜色の歌姫



終章——古を抱いて

689

吉野の宮に幸^{いで}せる時、弓削皇子の額田王に贈り与ふる歌一首
古^{いにしへ}に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡りゆく

額田王の和へ奉る歌一首 倭京より進入る
古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし我が思へるごと

『万葉集』第二卷

吉野の山々に、あかく紅葉が色づき、緑の葉と錦織りに、四囲の景色を彩^{いろど}っていた。
遠くに響く滝の音に耳を傾けつつ、皇太后となった讚良は独り、吉野宮の中庭にしつらえられ
た亭^{おたまや}に坐^まっていた。

三年前の九月、天武と贈り名された天皇、すなわち大海人皇子が五十五歳で崩御した。大
友皇子との軍に勝^{いく}ち、高御座に登^{のぼ}り、十四年の治世を経ての死であった。

その一月後、天武天皇が大田皇女に産ませた二十三歳の大津皇子が、謀叛を企んだとして死を賜った。

大津皇子は容貌に優れ、詩歌の才もあり、若い頃より朝政に加わり、父なる天武天皇から愛でられていた。ひとびとは、讚良皇太后が、己が腹から生まれた草壁皇子を天皇の御位に即けたため、大津皇子無実の罪を着せたのであると嘯き合った。

讚良皇太后は何も言わなかった。ただ、天武天皇の喪が明けるまでは、自ら稱制して政務を執るとのみ宣した。

この年一月一日、群臣、諸国の豪族どもが飛鳥御浄原宮の大極殿に集められ、元旦の朝拝が行われた。亡き天皇の喪のため、二年の間、行われなかった儀式である。いよいよ喪が明けられ、草壁皇子の即位が行われるものと、ひとびとは信じた。

その矢先、草壁皇子は病に倒れた。ついに床から起きることなく、四月になり、二十七歳で薨じた。ひとびとは、大津皇子の怨霊の仕業と噂しあった。

讚良皇太后には、己がただ独りの子の死を嘆くいとまはなかった。天武天皇とともに始めた律令と国史の編纂を進めねばならなかった。

律令とは、刑罰を定める律と、統治のあり方を定める令からなる、国の法。さらに、国の来し方をまとめた国史。この二つがなければ、蕃国と誹られる。唐や新羅の侮りを受けぬためにも、遅滞は赦されない。

やっと、律令のうち「令」だけが成ったばかりであった。讚良皇太后は喪に服することもなく政務を進め、この六月、二十二巻の令を諸国の司に賜った。

——皇太后が、涙を浮かべるのを見たことがない。

ひとびとは嘯き合った。剛毅な御氣質よ、と称える者は少なく、冷ややかに情のない御方と誇り、あるいは懼れる声のみが伝わってきた。

令の配布を終え、八月、皇太后は僅かな伴を連れ、吉野宮を訪なった。多くの者が死んだ……。

十八年前、大友皇子を欺くため、大海人皇子は僧形となり、讚良皇女と呼ばれた彼女とともに吉野に籠もった。この庭で遊んでいた草壁皇子も大津皇子も、そして大海人皇子もすでに世にない。吉野で大海人皇子に仕え、伊賀越えを共にした舎人の朴本大国、朴井雄君、東国で兵を調えた村国男依、海部石床、すべて死んだ。すでに、壬申の軍は昔語りであった。

軍から十七年、休む間とてなかった。なすべきことは山のようにあった。なすべきことをなし、世は治まった。世は治まるうとも、なすべき政務は減らなかつた。国を統べることは、すなわち、膨大な雑事を滞りなくこなすことであつた。軍のために近江京を支えていた多くの大官が流罪となり、政事を担う人材は乏しく、新たに官人を募らねばならなかつた。多くの事どもを負わされ、天武天皇は疲れて病み衰え、眠るがごとく崩御した。

なすべき政務はすべて、皇太后に遺された。

「不比等か……」

密やかに近づいた沓音(くつお)に、過ぎし日々の想念に耽っていた皇太后は、貌を上げた。

三十一歳の藤原不比等であつた。

壬申の軍の後、新たに官人を募ったとき、山背にある豪族の子と称する十四歳の田辺不比等が飛鳥に現れた。

ふひと……。

初めてその姿を見、その名を耳にしたとき、讃良皇后の脳裡に、かつて、燃えさかる斑鳩寺で土蜘蛛の安見娘が断末魔に遺した呻きが蘇った。

讃良は不比等のことを調べさせ、ある日、密かに呼び出し、問うた。汝が氏名は田辺ではなく中臣、そして汝が父は中臣鎌子であろう、と。

不比等は俯き、頷いた。中臣金が壬申の軍で斬られより、中臣は政事より遠ざけられていた。それ故、不比等は中臣の出であることを隠したのであろう。

讃良はさらに問うた。汝が母は？

すでに死んだ。不比等は応えた。車持という小豪族の娘であったと教えられた。

讃良は不比等に、かつて中臣が飛鳥の北に領していた地の名をとって、藤原と名乗らせ、その才を愛でた。伶俐で智慧が深い藤原不比等は、時を重ねるごとに、讃良の側近くに召されることが増えた。やがて天武天皇が崩御し、大津皇子の斬罪、草壁皇子の死と、波乱が続く中、淡々と誤ることなく物事をこなし、問われれば確かな応えをする不比等に、皇后の信はより篤くなった。吉野宮に随伴したなかに、不比等が混じっているのは、もはや誰も奇異とは見なかった。

「昨夜より、さまざまな考えを巡らしたれど、やはり……」

不比等は拝礼し、静かに口を開いた。

「皇太后御自ら、皇位に即きたまうがよいかと」

「他に策はなしか……」

「令は定められたれど、諸豪族や民が新しき法式に随わせねばならず、また、律の制定と国史の編纂も急務。皇后として亡き天皇を輔け奉りたもうた皇太后こそ、高御座にのぼりたまひ、国の行く末を定めるに相応しいかと」

「汝は吾に……」

鎌子に似ている……。十六歳の折り、筑紫の朝倉宮で眼にした四十七歳の中臣鎌子と、目の前にある三十一歳の不比等を思い比べつつ、讃良は寂しげに笑んだ。

「なおも、努めよ、と？」

「珂瑠皇子が、皇位を継ぎたまうまでは」

珂瑠皇子は、亡き草壁皇子の忘れ形見、未だ六歳。すなわち、讃良の血を受け継ぐただ独りの皇子。

高市皇子や忍壁皇子、他にも天武天皇が生ませた皇子は多い。彼らを皇位に即ければ、讃良は政事より遠ざけられよう。それでもよいのか……。不比等は口には出さず、そう迫った。

「汝の言に随おう」

讃良は、堅い面持ちで頷いた。

「年が明ければ、吾は天皇の御位に即く。調べよ」

藤原不比等は拝礼し、去った。

暖かな日差しに、ついまどろみかけた讃良の耳に、軽やかな馬蹄と、門を開ける音が響いてき

た。

女孀が歩み寄り、弓削皇子と柿本人麻呂の訪ないを告げた。

弓削皇子は十五歳。亡き天武天皇が、大友皇子の妹との間に儲けた子。大友皇子の妹を妃に迎えたのは、壬申の軍で百済王族との間に生まれた亀裂を埋めるためであった。優しげな性で、歌を好んだ。

柿本人麻呂は三十三歳になった。藤原不比等と同じ頃、募りに応じて飛鳥に來た。官位は高くはないが、和歌の巧者としてその名が知られている。

「伊勢は如何であった」

亭に椅子を与えられ、坐した二人に讃良は問うた。

「額田郎女に会えたか」

「然り」

弓削皇子は頷いた。

「汝は、額田郎女に会うのは、初めてであったな」

讃良は微笑んで十五歳の皇子を見つめた。

「郎女は、健やかであったか」

「然り。健やかにして……」

皇子は眼を輝かせて続けた。

「美まし方であった」

美まし……。讃良は訝しげに首を傾げた。壬申の軍以來、額田郎女とは会っていないが、すで

に六十に近いはず、しかも、自ら貌に三筋の傷を穿った額田郎女が……？

讃良が、伊勢に住む額田郎女に使を派するのは初めてではなかった。

十七年前、大友皇子に押し込められた倭媛皇后と十市皇女を救い出して後、額田郎女は姿を消したままであった。讃良が、額田郎女の行方を知ったのは、軍が終わって七年の後であった。

壬申の軍のあと、天武天皇は伊勢の地に、斎宮を建てた。勝利を授けたもうた天照の女神を祀るためである。

十市皇女は、伊勢の斎宮へ行くことを好んだ。幾度も足を運んだ。

四月の暖かな日であった。不意の病に倒れた三十一歳の十市皇女は「伊勢へ、随れゆけ」と呟いた。さらに「母なる人に……」と呻いて、皇女はことされた。十市皇女が頻りに伊勢に出かけたのは、その地に隠れ住まう額田郎女に会うためであると、天皇は初めて知った。

天皇は、伊勢に人を派して郎女を探させた。郎女は、かつて巫那と呼ばれていた頃に住んでいた洞の近くに苦屋を建て、そこに暮らしていた。天皇は自ら伊勢に赴き、郎女と会おうとして拒まれた。ただ、郎女は書をのみ返し、壬申の軍の一年後、大海人皇子の母なる稗田阿礼が死んだことを告げた。

娘である十市皇女の死につづき、実の母である稗田阿礼が六年前に死んだことを知り、天皇はその夜、人を遠ざけ、独り寝屋に籠もった。

それから天皇は、伊勢に人を派し、飛鳥に來て政事に加わってほしい、と幾度も伝えた。その都度、郎女は拒んだ。貌の傷を恥じてであろう……。ひとびとは噂しあつた。

天武天皇が崩御して後、皇太后として政務を執ること三年、讃良は疲れていた。輔けを欲した。藤原不比等の献策で、新たに唐風の都城を造営する事が決まりつつあった。万の民を使役せねばならぬ都城造営に、歌舞をもつて狂心の渠の興事を支えた額田郎女を、讃良は欲した。男童の頃、額田郎女の側にあつて歌を蒐め、漢の文字で表していた柿本人麻呂が使者に選ばれた。同行を願つたのは、弓削皇子であつた。皇子は和歌を好み、さかんに人麻呂の邸に出入りし、額田郎女の歌に憧れていた。

「郎女は嬉しげであつた。嬉しげに笑っていた。笑うその貌は燦煌しかった」

弓削皇子は声を弾ませて語つた。

「郎女は言つた。吾が叔父なる大友皇子は漢詩に秀でていた。大友皇子の血筋である吾が和歌にいそしむは、よきことなり、と」

大友皇子の名を口にする事は戒められていた。齢を重ね思慮深さを身につけた柿本人麻呂に袖を引かれ、弓削皇子は口を噤んだ。讃良は気づかぬげに問うた。

「吾が書への応えはなんと？」

弓削皇子は柿本人麻呂を見やつた。人麻呂はしばし黙し、応えた。

「同じく、子を亡くした母としてならば、語らいあいたい、と」

子を亡くした母……。讃良は胸を突かれた。草壁皇子の貌が脳裡に浮かんだ。そして、十市皇女と遊んだ稚なき頃が……。

そう、額田郎女も、ただ独りの子を失つた母。

「人麻呂……」

讃良の声がかすかに震えていた。

「十市皇女が薨じた折り、高市皇子が詠んだ歌を汝は記し留めてあつたな」

「然り」

「その歌を木簡に記し写し、額田郎女に遣わせ」

三輪山の山辺真麻木綿短木綿

かくのみ故に長しと思いき

高市皇子はこう詠んだ。三輪山の麓に飾られている麻糸の幣帛のように短かつた汝の命よ。そうとは知らず、もつと長く生きるものと思つていたのに。

弓削皇子と柿本人麻呂が去つた後、讃良は再びもの思いに耽つた。そう、あの頃。額田郎女を養いの母としては、十市皇女と共に育まれた日々。津軽で姦された十市皇女の沈んだ心を木幡と共に慰めた難波や筑紫での日々。

十市皇女の、辛い事の多かつた命が、かくも早く果てることになろうとは、あの頃は知らずにいた。時の流れの酷さよ。

「讃良」

貌を上げると、木幡が立っていた。同じく四十四歳。長年の政務の疲れのせい、貌に深く皺の刻まれた讃良と比べ、ふつくらとした木幡は、稚ない乙女の頃の面差しのままであつた。

壬申の軍の後より、木幡は吉野宮に住まい、飛鳥へは還らなかつた。かつての天智天皇、すなわち百済人・豊璋王子の皇后であつた木幡が、政事の近くにあれば何かと妨げとなる、そう念じてのことであつた。

「木幡の実を摘んで来た」

黄色いその実を、そつと讃良の膝に乗せ、木幡は向かい合つて坐した。

「木幡……」

讃良の眼に涙がにじんだ。

「額田郎女は……会わぬと応えた。ただ、子を亡くした母として語らうのならば、会うと」

木幡は女童の頃のような微笑みを慎ましく浮かべ、黙して讃良を見つめた。

「それがかなうものなら……」

左右の手で貌を覆つて泣く讃良に、木幡はそつと寄り添い、肩を抱いた。わかっている……。

一人の母として泣くことは、いまの讃良には赦されぬことは。

「政事の輔けはできぬが……」

木幡は口を開いた。

「吾と二人きりならば、心ゆくまで汝も泣けよう」

伊勢――。

波の打ち寄せる浜辺に、五十七歳の額田郎女は立っていた。その傍らに、六十六歳の鏡郎女が坐していた。

「何故に……」

真つ白となつた髪を、額田郎女に結われつつ、

鏡郎女は問うた。

「讃良を輔けてやらぬ」

「讃良ならば、吾の輔けなどいらぬ」

鏡郎女の、白いものの目立つ頭の後ろに髪を束ね、紐で結いつつ額田郎女は応えた。

「吾はただ、古を恋い、古を懐きつつ、残る命を生きたい」

額田郎女は、ふと、讃良の使者として訪れた十四歳の弓削皇子を思い浮かべた。どこか、祖父である豊璋王子に似ている……。そして、むろん父である大海人皇子にも。

そう思いつつ微笑んだ。くつきりと残る三筋の傷も、時が刻んだ皺も、その微笑みを浮かべているかぎり、巫那と呼ばれた頃よりの美しさを損ねない。

髪を結い終え、手を離れた額田郎女の方に向きつつ、鏡郎女は問うた。



伊勢の海

「不破で、かの皇子に抱かれた、その古いにしえをか？」
額田かみ郎女は応えず、日の光を浴びて煌めく海を見つめていた。

あとがき

大化の改新から壬申の乱に至る古代史に題材をとった小説に、井上靖の『額田かみ女王』がありま
す。私が子供の頃テレビドラマ化され、ヒロインの額田女王（『万葉集』では額田王と表記）を岩下
志麻が演じ、中大兄皇子（近藤正臣）と大海人皇子（松平健）との三角関係に焦点が当てられてい
ました。

この時代を扱った作品には、故黒岩重吾氏の小説『茜に燃ゆ』、里中満智子氏のマンガ『天上
の虹——持統天皇物語』などがあり、それぞれ根強い読者を持っているようですが、私もまた、
この古代史上もつとも波乱に満ちた時期を、物語にしてみたいという大それた欲求を、いつの頃
からか持っていました。

これまで、古代日本を舞台に『日輪の王国』『女神の末裔』『影なる王女』といった小説をこ
のHP上で掲載しました。『日輪の王国』は邪馬台国の女王・卑弥呼と、その後を嗣いだ台与とよを
主人公にした完全なファンタジー。『女神の末裔』は『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル伝
説、『影なる王女』は『日本書紀』の武烈天皇から継体天皇への王朝交代を題材にしていますが、
かなり史実を無視したストーリーになっています。

しかしながら、今回、私はひとつの制約をあえて設けました。なるべく『日本書紀』に描かれ

た歴史に従って書くということです。

『日本書紀』が成立したのは七二〇年。この小説の重要人物の一人で、持統天皇となる讚良皇女が亡くなって十七年後です。ちなみに『日本書紀』は、持統天皇の退位（六九七年）で終わっているのですが、本書の最大のクライマックスである壬申の乱は六七二年、すなわち『日本書紀』成立より四十八年前です。

ある本にこんなことが書かれていました。『日本書紀』の記述の中で、史実どおりであるのは、成立時に実在した人間が、その時代を生きた頃、すなわち大化改新（六四五年）以降で、それ以前はまったくのデータラメである可能性もあるし、大化改新以降だって、勝利した大海人皇子・持統天皇の血を引く時の統治者（元正天皇、持統天皇の孫にあたる女帝）に都合よく改竄かいざんされているだろう、と。

この主張が、歴史学界でどの程度支持されているのか私は知りません。しかし、この物語を書くにあたっては、大変、励みになりました。私が書いたことこそが歴史的事実で、『日本書紀』の記述はそれをもとに改竄したものだとしても、とりあえずはつじつまがあう、その程度の「逸脱」は許されるだろうと。

かくて、『日本書紀』では田村大王（舒明天皇）と宝大王（皇極天皇）の間の子とされている大海人皇子は、田村大王が犯した巫女との間に生まれ、長らく伊勢に捨てられていたことになり、皇族の「額田王」は、捨て子であった「額田郎女」となった。しかしながら、その他の人物設定については、一部をのぞき、ほぼ『日本書紀』のそれに基づいています。

私がやった最大の史実からの「逸脱」は、『日本書紀』では、後に中大兄皇子と名を変え、やがては天智天皇となる葛城皇子が、三韓出兵の前に殺され、百濟から亡命してきた豊璋王子が中大兄皇子を名乗り、天智天皇として日本を統治するという設定です。

これについては、豊璋王子が初めて大和を訪れるくだり（第四部第一章）を書く前に、思っていたことです。実をいうと、豊璋王子を出すつもりなんかありませんでした。葛城皇子が史実どおりに天智天皇となり、大海人皇子の敵として立ちはだかる予定でした。

ちなみに、私のパソコンには、ボツにした「プロローグ」が残っています。『万葉集』に載っている有名な歌（あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る）を題材に、すでに中大兄皇子（葛城皇子）の妻となっていた額田王と、かつて彼女の夫だった大海人皇子の再会を描いた場面を冒頭に置き、話は遡って伊勢での二人の出会いを描くつもりで書き始めました。ところが、話が進むにつれ、最初に書いた「プロローグ」でのキャラクター設定とは、まったく違った方向に物語が動き始めたのです。結局、書き直すしかありませんでした。

採用された「プロローグ」とどう違うか、興味のおありの方は、ここをクリックしてください。読み返してみますと、私は当初、Sである額田郎女とMである大海人皇子との、加虐被虐の関係で話を進め、その額田郎女を兄に奪われた大海人皇子の壮大な復讐劇として、物語を展開するつもりだったらしいことが分かります。

しかし、書き進めながら私は、はたして葛城皇子は、主人公である大海人皇子に立ちはだかる強大な敵となるだけのキャラクターなのか？……という疑問が芽生えました。葛城皇子は、野望をむき出しにした、しかしそれだけの、言ってみればつまらない男です。そんな男にしてしまっ

たのは私なんです、ともかく、白村江の戦いから壬申の乱へと至るクライマックスにおいて、一方の軸になるだけの魅力がある人物だとは、とても思えなかった。

そこで、出すつもりはなかった豊璋王子が、白村江で敗れて逃れた後、一種の亡命政権として新たな王朝を樹立し、天皇と名乗ったという荒技を使ってしまったわけです。

そのヒントになったのは、ある本で、高名な心理学者が、「大和朝廷って、百済の亡命政権でしょ？」と言ったひとことにあります。その心理学者は、別に古代史の専門家ではありません。専門家ではないが故に鋭い直感でずばりと本質を言い当てる、そういうタイプの方のようです。

古代史の専門家の間でも、当時の大和と百済の結びつきの強さから、両国は同系統ではないかという説がありますが、いずれにせよ、白村江の戦いで敗れた後、大量の百済人が大和に亡命してきたことは、「日本書紀」にも記述があります。しかも、天智天皇が築いた近江京近辺に、多くの百済人が移住している。そして、近江京が出来た以後、大和朝廷は、国史や律令編纂といった、当時における文明国の体裁を整えようとしたらしいことも伺える。であれば、唐や新羅との戦いに敗れた百済人が、海を越えて日本に移り住み、一種の亡命政権を樹立し、唐や新羅に負けない国家を築こうとしたのが、現在の日本の出発点となったであろうことは、可能性としてありえる。

だったら、いっそ、近江朝廷は百済の亡命政権であり、それに対して土着の王族である大海人皇子が、突然やってきた百済人の支配に対抗して立ち上がったのが壬申の乱であるというストーリーも成り立たなくはないな。そう気づいて、停滞していた執筆が一気に進んだわけです。

私の勝手な思いこみで、天智天皇とされてしまった豊璋王子が、深みのあるキャラクターになった。私設定変更が、百済の背後にある当時の先進文明国・唐のグローバリズムと、小国日本のローカル文化を担うキャラクターが必要となる。こうして、『万葉集』最大の歌人と言われる柿本人麻呂までが顔を出すことになった。

こんな調子で進めていくうちに、気がつく、この時代における有名人物はあらかじめ出そろってしまいました。出す以上は、それぞれのキャラクターをそれなりに書き込まなければならぬ。その材料は結局、『日本書紀』や『万葉集』などに求めるしかない……。

正直、たかがBB小説という特異なフェティシズムがテーマの小説を書くために、これほど『日本書紀』や『万葉集』という古代日本の遺産とつきあうことになるうとは、思ってもみませんでした。私の手元にある『日本書紀』は、講談社学術文庫から出ている現代語訳ですが、学生時代に購入し、断片的にしか読んでいなかったためかびかそのままだった文庫本は、今やカバーは破れ、手垢にまみれています。

さらに、少しでも物語のヒントになればと、古代史の本を読みあさりしました。感謝と敬意をこめて、ここに列挙いたします。

『日本書紀（下）全現代語訳』宇治谷孟訳、講談社学術文庫、1988

『日本古典文学大系 68 日本書紀・下』坂本太郎他校注、岩波書店、1965

- 『現代語訳対照 万葉集・上』桜井満訳注、旺文社文庫、1974
- 『日本古典文学大系3 古代歌謡集』土橋寛他校注、岩波書店、1957
- 向井毬夫『額田王の実像——紫のにはへる妹』集英社、1997
- 遠山美都男『大化改新——六四五年六月の宮廷革命』中公新書、1993
- 遠山美都男『壬申の乱——天皇誕生の神話と史実』中公新書、1996
- 遠山美都男『白村江——古代東アジア大戦の謎』講談社現代新書、1997
- 遠山美都男『「日本書紀」はなにを隠してきたか?』洋泉社、1999
- 遠山美都男『天皇と日本の起源——「飛鳥の大王」の謎を解く』講談社現代新書、1997
- 武光誠『邪馬台国と大和朝廷』平凡社新書、2004
- 武光誠『女帝の国、日本』宝島社新書、2005
- 成清弘和『女帝の古代史』講談社現代新書、2005
- 工藤雅樹『蝦夷の古代史』平凡社新書、2001
- 千田稔『飛鳥——水の王朝』中公新書、2001
- 千田稔『伊勢神宮——東アジアのアマテラス』中公新書、2005
- 義江明子『つくられた卑弥呼——「女」の創出と国家』ちくま新書、2005
- 岡田英弘『倭国の時代』朝日文庫、1994
- 岡田英弘『日本史の誕生——千三百年前の外圧が日本を作った』弓立社、1994
- 龐谷寿『藤原氏千年』講談社現代新書、1996
- 門脇禎二『飛鳥と亀形石』学生社、2002

『歴史群像シリーズ特別編集・飛鳥王朝史』学習研究社、2005

偉そうに参考文献を並べてみましたが、優れた学究の研究成果を利用させていただいただけの作品になったかどうかは、自信がありません。ただひとつ言えることは、私がこれまで書いたなかでも、(私にとって)愛すべきキャラクターが数多く登場する小説は、初めてだということです。

書き始めてから二年近くの間、私はヒロインの額田郎女や、十市皇女、讚良皇女、木幡(倭媛皇后)、宝大王といった魅力的な実在の女性たち、鏡郎女や安見娘といった架空の土蜘蛛たちと、あたかも大海人皇子になったかのように付き合い、時に励まされ、時に戸惑い、時に嫌な思いを味わわされながら過ごしてきたように思います(ちなみに、今の私は、壬申の乱で勝利した時の大海人皇子と、同じような年齢です)。

本当の過酷な歴史を動乱生き、日本というひとつの国家を築き上げた彼女等彼等に感謝の意を表しつつ、なくもがなの「あとがき」を終えます。